

大都市において継承される都市民俗儀礼の変容に関する地域社会学的研究

—大阪市内における「精霊流し」の事例を中心に—

京都大学大学院 堂本直貴

1 目的

本研究の目的は、日本の近代都市社会内部において慣習的に継承されてきた民俗の年中行事が、どのようにその形式と意味を変化させてきたのか、またその激しい変化の現実を人々がいかんにして受容し対応してきたのか、そしてこうした「都市民俗儀礼」がこれらいかんにして存続可能なのかについて、大阪の「精霊流し」を事例に考察することにある。それは、伝統が、激しく変容するなかで、人々の心性と地域社会の再編成がどのように関連しているのかを解き明かす試みでもある。

本研究が取り上げるのは、大阪市内の21カ所で毎年8月15日おこなわれる精霊流し行事である。精霊流しは、盆儀礼で先祖供養のために使用された供物を川に流すことが本来の形式である。しかし、大都市住民がこれをおこなうことは、河川環境を悪化させることから、現在では法的に禁止されている。しかしながらこうした慣習と「環境保全」の問題は、1792年（寛政四年）の文書においても確認できるように現代特有の発想ではない。日本社会が近代に入ると、都市の美的景観の保護と市民意識の涵養、環境問題という視点の登場などがおこり、大阪市は、1935年に「盂蘭盆会精霊流し」という公的イベントを導入することで、それまで「イエ」単位で行われていた精霊流しを、供物供養の公的場所の設置、さらに川に流さず集約回収（最終的にはゴミとして回収される）する方向へと大きく変化させていった。ここに「創られた伝統」が発生する。この「大転換」は今日の「精霊流し」にまで引き継がれている。本研究では、この「大転換」を現代の担い手や住民がどのように受けとめ、地域社会の再編成のなかに位置づけているのかを明らかにする。

2 方法

本研究では、「精霊流し」を管轄する大阪市役所が作成した「精霊流し実施場所一覧」を参考に2011年8月から12月にかけて、大阪市内の精霊流し実施場所の主催者や参加者など15ヶ所23名を対象にインタビュー調査を実施した。主な質問内容は、主催者組織の概要、精霊流しをおこなうに至った経緯（歴史）や意識、実施日当日の運営状況、現状や将来における運営実施の課題などである。

3 結果

担い手の状況から見ると、精霊流しの運営と今後の継承に関する意識は二極化している。それは調査実施年度をもって「精霊流し」行事を打ち切った地区とそうでない地区との区分に対応していた。実施の終了を決定した地域は、担い手の大幅な不足と高齢化、地域社会の無理解と非協力、宗教的な行事を地域社会の行事に組み込むことへの住民の抵抗感などが継承を断念した要因としてあげられた。反面、今後の運営に関してあまり大きな問題がないと回答した地区では、大阪のユニークな都市自治組織として成立してきた地元町会や遺族会などの組織および複数の組織のネットワークや人的資源を活用し、民俗行事としての「精霊流し」の伝統の継承を明確に意識して運営していることわかった。

4 結論

全体的に衰退／消滅の傾向が見られる現代の精霊流しを、人口流出の激しい都心部の町会は地域の凝集性を高めるコミュニティ・イベントとして成長させるアイデアを持つ地区や、一時中断していた地域の祭礼の一部に精霊流しを組み込み「祭りコンプレックス（複合体）」をつくりあげることで実施に至った地区もあった。都市化の影響などによって大きく変化せざるをえなかった伝統行事に、あらたな意味を付与（＝「創られた伝統」の再創造）することは、近代国民国家などの上からの一方的な伝統の押し付けである「創られた伝統」とは異なる、下からの民衆的な想像力の産物といえるだろう。（分析内容や詳細な結果は当日のポスターと配布資料にて説明をおこないます）